

《ルネ・マグリットの男》から鉱物標本まで 「モダン中之島」の企画展示もよろしく

戦前から中之島は大阪の芸術・文化の拠点だった。大阪市中央公会堂(1918年開業)や朝日会館(1926年開館)では、音楽会や演劇、美術展が開かれ、朝日ビルディングには、鍋井克之、国枝金三らが指導した中之島洋画研究所があった。戦後もフェスティバルホール(1958年開館)や具体美術協会の美術館・グタイピナコテカ(1962年開館)があり、現在は、大阪中之島美術館や国立国際美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、中之島香雪美術館や大阪市立科学館などミュージアムの集まった「博物館島」とも言える地域になっている。

文化芸術の発信拠点である中之島は、大学とも関係が深い。中之島四丁目は、昭和6(1931)年に大阪帝国大学が発足した大阪大学発祥の地であり、対岸の堂島リバーフォーラムには、現在、大阪芸術大学のサテライトキャンパスもある。この4月には、大阪中之島美術館に隣接する大阪大学中之島センターに、新しく大阪大学総合学術博物館のサテライト展示コーナーが誕生したほか、美術史や美学、演劇学、音楽学、文芸学研究の市内での拠点となる中之島芸術センターも設立された。それをご紹介します。

まず驚かされるのが、改装された中之島センターに入り、ロビーから2階のカフェに通じる中央の階段踊り場を飾る美術家・森村泰昌さんの作品《適塾の集い》である。



阪大博物館の資料が展示されているカフェ

本欄に何度もご登場いた

だっているが、森村さんは、古今東西の著名な絵画や写真をとりあげ、自ら作中の人物に扮して作品にする世界に知られたアーティストである。大阪大学の源流の一つである適塾を、大学の依頼でテーマにしたこの新作は、「塾生たち」「洪庵」「八重」の三点からなる意欲作で、緒方洪庵に森村さんが扮し、中央の「塾生たち」では、師匠を囲んだ大村益次郎や福沢諭吉、佐野常民、橋本左内つねたみなどの弟子たちには、公募で選ばれた阪大生が扮している。

手塚治虫の曾祖父で漫画「陽だまりの樹」のモデルとなった手塚良庵は見たことのある顔だと思ったら、私のいた美術史研究室の小野雄希君が扮していた。遠方の博物館に就職した彼にとっては忘れがたい作品となっただろう。

大阪大学総合学術博物館の所蔵品や寄託品が1・2階に展示され、1階には、以前に「おおさかKEYわーど」第59回(2015年)で紹介した、大阪築城の“残念石”を素材に樹脂で型取りした新大阪駅前にある今井祝雄さんのモニュメント《タイムストーンズ400》の原型(1982年)が置かれている。大阪築城400年記念に制作が開始されたこのモニュメントは、毎年一つ石を積んでいき、あと一つで20段がそろって完成のところ、最後の一つを残して未完のまま駅前にある作品である。



今井祝雄《タイムストーンズ400》

また2階のカフェには、博物館所蔵の鉱物標本のほか、ユニークな金属彫刻で知られた今村輝久さん(1918~2004)の作品や、昭和45(1970)年の大阪万博の繊維館に展示されたフロックコートに山高帽の四谷シモン《ルネ・マグリットの男》も展示され、作品や学術資料に囲まれ、誰でもコーヒーや軽食を楽しむことが出来る。

そして、新しく誕生した大阪大学中之島芸術センターだが、大学における高度教養教育と社会人教育のプラットホームとして開設され、アートと社会との共創関係を重視して、3階に演劇や音楽会ができるスタジオ、4階に美術や歴史展示が可能なギャラリーが設けられた。

現在、芸術センターの開館記念としてギャラリーでは、昨年、豊中キャンパスにある大阪大学総合学術博物館で開催された特別展「モダン中之島コレクション」を再構成した「アトリップ・ナカノシマ」展を開催している(7月30日まで、10時30分~17時、月曜・祝日休み、入場無料)。規模は小さいが、昨年の展覧会を凝縮した展示である。

アートを求めて中之島に行くと、またまた立ち寄り先が増えてしまった。美術館にお越しの際は、隣の大阪大学中之島芸術センターと総合学術博物館のサテライト展示にお立ち寄り下さい。

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ―増殖するマンモス/モダン都市の現像―」(創元社)など。